

Werkstattだより

ヴェルクシュタット
2002年11月発行 弦楽器フェア特別号

良質な弓を購入する事の勧め

良質な弓とは

私は楽器の製作者なので、「良い楽器本体の勧め」を述べたい気持ちがあるのは山々なのですが、今回はあえて「良い弓」について述べたいと思います。というのは、良質な弓という物にたいして、勘違いをしている人があまりにも多いからです。良い弓を使ってはじめて、良い楽器の性能を引き出せるのです。事実、楽器の不具合で頭を悩ませていた人のその原因が、楽器側ではなく（正確に言えば楽器側"だけ"ではなく）、弓の方にその原因があると言う事も珍しくはないのです。

さて、「良質な弓」と言って、「高価」と考える人は多いと思いますが、高価な弓だからといって良質であるという保証は全くありません。楽器もそうですが、特に弓は、その「性能の要素（物理特性）」を理解して始めて、良い弓を選ぶ事ができるのです。すなわち、選ぶポイントをきちんと理解していれば、比較的簡単に良い弓を選ぶ事が可能なのです。なぜならば、弓の構造はシンプルなので、楽器のように構成部品が多く複雑な要因が少ないからです。しかし、その逆の事も言えて、弓は楽器本体と比べて単純な要素しか持っていないために、その要素を勘違いしていると、完全に間違った弓の選び方をしてしまうのです。

極論になりますが、楽器の良し悪しとは「良い音が出るか、そうでないか」です。しかし、弓の良し悪しとは「演奏可能か、不可能か」という根本的な要因を含んでいます。不可能な弓を使っているのは、原理的に、勉強（習得）が不可能な事がでてくるのです。

良質な弓の性能の要素

1. 弓竿の腰の強さ（弓竿の剛性）

弓の性能の要素の中でこの「弓竿の剛性」が一番重要です。そして難しい事に、これはフェルナンブコ材そのものが持つ物理特性で、原材料によって当たりはずれがかなりあるのです。さ

らに難しい事に、その原材料を見ただけでは完全にその「腰の強さ」を見分ける事は不可能です。すなわち、同じ製作者の弓、同じ価格帯の弓でも、個々の弓によって性能差がかなりあるのです。

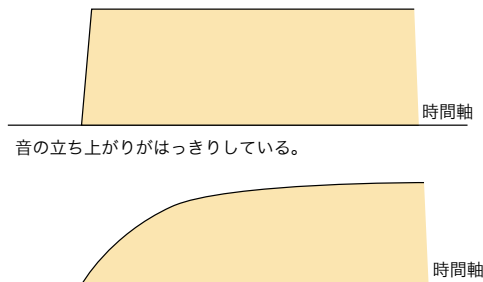
また、自分は楽器や弓には少々詳しいという自負のある方に多いのですが、古い弓（値段の高い）は腰が柔らかいものと勘違いしている人が多いのです。事実、高価な古い弓で腰のない弓がとて多いのですが、それらは感心できるような物とは言えません。本当に良い古い弓とは、びっくりするくらいの「腰の強さ」を持っているのです。先に述べたような勘違いしている判断基準を持っている人は、「本当の意味での古い良質弓」を知らないだけなのです。

誤解の無いようにはっきりと言いますが、私は新作弓がいいとか、古い弓が悪いとかを言っているわけではありません。本当の意味で「良質な弓」であれば、新しい弓であろうと古い弓であろうとそれはどうでも良い事です。

さて、そのような腰が強い弓だとどのような利点があるのでしょうか？それを書いてみましょう。

圧力の掛かり具合

腰の無い弓の場合、弓の真ん中付近において弓が潰れてしまいます。従って、そのような弱い弓を使っている人は無意識に、弓の中央部分で弓の圧力を抜いてしまっているのです。こうすると、それ以降（ダウン・ポウの場合は弓先）での圧力が抜けてしまうのです。場合によっては弓の吸い付きが無くなり、弓がとび跳ねてしまったり、または弓先部分での弓への意識が無くなってしまったりします。また、弓中央部分での圧力が無くなるので、音量自体が小さいのです。



音の立ち上がりがはっきりしている。

圧力を掛けられないので、音の立ち上がりが鈍い。

また、弓竿の腰が弱い場合には、弓にかかる圧力が小さくなり、そのような弓を使っている場合には音の出だし（発音のレスポンス）が鈍くなってしまい

ます。またスタッカートなどのキレも鈍いのです。腰の弱い弓を使っていると、これを克服しようとして、音の出だしにアタックを付けてしまう変な癖が付いてしまう事さえあるのです。ま



Deutscher Dipl. Geigenbaumeister
ドイツ・ヴァイオリン製作マイスター
日本弦楽器製作者協会員

佐々木 朗

新作楽器製作

- *ヴァイオリン 万円
- *ヴィオラ 万円
- *チェロ 万円

楽器修理・調整・販売、弓等

毛替え、弦から、新作楽器注文まで
お気軽にご相談ください。



渦巻きは楽器の全てを表しています。



土、日、祝日も営業しております。

Geigenbauwerkstatt Sasaki
佐々木ヴァイオリン製作工房

〒166-0003 東京都杉並区高円寺南

2-28-8
Tel. Fax 03-3317-0313 (工房)
e-mail: info@sasakivn.jp

高円寺駅より徒歩7分
新高円寺駅より徒歩6分

好評!!
ホームページ <http://www.sasakivn.com>

地下鉄丸の内線 高円寺駅 南口
中央線・総武線
日本医歯薬専門学校
コンビニ MINI STOP
新高円寺

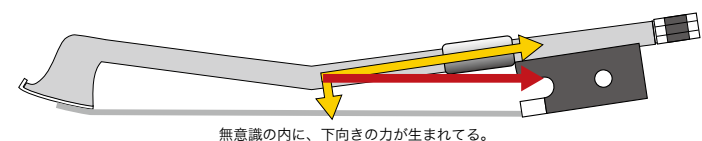
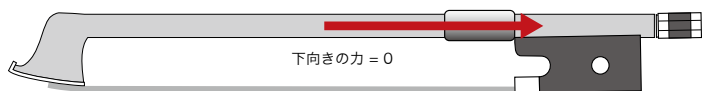
たそれ以外にも、ワンフレーズ中の音のメリハリ（音量的なダイナミクス、発音の切れ）なども無くなり、表情が乏しくなるというの、結構弓が原因であるという事も多いのです。

一番簡単な例としては、**ダウン・ボウで普通に発音し、弓の中央部分近くになったら急激なクレッシェンドをしてみてください。腰のない弓では、これが困難なのです。**

運動の方向

上記で、弓竿の腰がとても重要という事を述べました。そこで腰の弱い弓でも、弓毛をパンパンに張れば、腰の強い弓と同等になると考える人もいるでしょう。または無意識のうちに腰の弱い弓で、毛をパンパンに張って演奏している人も多いのです。

しかし両者には大きく、根本的な違いがあります。これを説明してみましょう。次の弓図は「腰の弱い弓を毛をパンパンに張った状態」と「腰の強い弓で、反りを保った状態」の略図です。特に、反りのある弓（図の下方）は、単純化するために曲線ではなく直



線を折り曲げた図としました。これは実際の反りのある弓の物理運動の微分系の運動と考えてください。

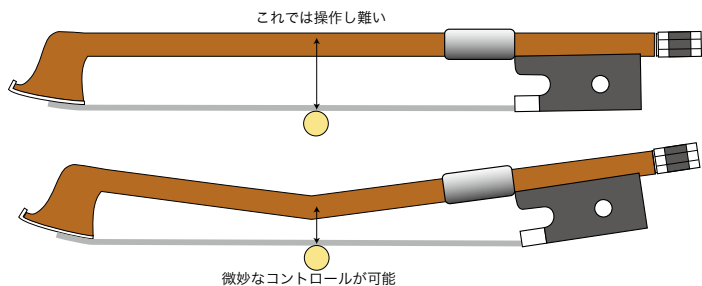
さて、図の上の弓を見てください。この弓の運動は赤矢印の向きの力が掛かります（人差し指による意図的な圧力に関しては、今は考慮しません）。このような弓の運動では、下向きの力は0なのです。すなわち弓が弦に吸い付く力が生まれず、弓がポコポコと跳ねてしまったり、または弦を力強く発音する事が難しくなります。

一方、腰の強い弓竿の場合、下図のように弓竿に反りを残した状態で演奏しても弓が潰れてしまう事はありません。このような弓の運動に必要な力の向きを分析すると、赤色の矢印（力のベクトル）を黄色の分力に分ける事ができます。すなわち、無意識の内に下向きの「圧力」が生まれているのです。この下向きの力が生じる事によって、弓は弦に吸い付くのです。また強い圧力を生む事ができ、それによって大きな音量や鋭い音の立ち上がりを演奏する事が可能になります。

このような「反りのある弓の運動」を物理学的に書くと、逆に混乱してしまう人もいます。そこで別の表現をすると、「反りのある弓の運動は、その反りに沿った弓の動きをする」と考えてください。弓を真横に引く運動ではないのです。

弦からの重心の距離

これは判りやすいと思います。弓の重心位置（この場合には弓重心の上下位置要素を考えてください）と、弓の作用点の距離が近いほど、弓の微妙なコントロールが可能になります。これを理解するためには、極端な例を考えてみるのがよいでしょう。例えば弓の竿と毛との距離が30cmも離れていた場合、作用点（弦と毛との接点）に意識を集中する事が困難になります。また、この距離が離れていると、跳ばしなどの運動をするときに、バランスの乱れ（弓のブレ）が生じやすいのです。このような意味から、



図の上図のように毛をパンパンに張っている弓は良くありません。

2. バランス

弓の性能の要素として2番目に挙げられる事は「バランス」です。時々この「弓のバランス」という事を、「弓の質量」だとか「静的重心位置」等と勘違いしている人がいますがそれは間違いです。それらは「バランス」のほんの一側面でしかありません。従って、弓の質量や静的重心位置などに拘りすぎていると、本質的な「バランス」を見失ってしまいます。

さて、このバランスという要因を的確に捉えるためには、中途半端な知識は邪魔になるだけです。素直な「試奏したときの感覚」こそが、大体は的を射ているのです。具体的な試奏方法（バランスの感じ方）は後記します。

3. 重さ

ここでいう「重さ」とは、測りで測った重さのことではありません。というのは、弓の材質、製作の特徴、バランスなどによっては、同じ重さの弓でもまるで異なって感じるからです。すなわち、弓の重さを測りで測定するようではいけないのです。自分の感覚こそが、真の意味での「重さ」です。私の工房では、あえて弓の重さを測定して「何グラムの弓」とは言わないようにしているくらいです。その方が、「弓の性能の本質」に迫れるからなのです。

この重さに関しては、難しく考える必要はありません。持ってみて、「あまりにも重い弓、軽い弓は却下」くらいに考えておけばよいでしょう。

4. 製作の質

これはとても重要な事です。良質な弓を選ぶ上での大前提といっても良い内容です。しかし、これは一般の方（プロの演奏者も含め）には判別不可能ですから、専門の技術者のアドバイスに従うしかありません。その意味で、今回は説明を省略します。

5. 健康状態

これは古い弓において、とくに深刻な問題です。弓は楽器と違い構造がシンプルです。一見構造が単純な方が傷みにくいと思われるかもしれませんが、これは逆なのです。構造がシンプルな分だけ、その構成部品（特に弓竿）が傷んでしまった場合には深刻な問題となるのです。

古い弓で弓竿が削られて細くなってしまっている弓。長年の反り直しで、弓竿が蛇行してしまっている弓。オリジナルのフロッシュがガタガタに傷んでしまっている弓。もちろん、途中で折れ修理をした弓など、不健康な弓がたくさん存在します。弓は楽器と違い、古くなる事によるメリットが少なく、その一方で、古くなる事によるデメリット（致命的な損傷）は多いのです。このような意味で、古い弓を選ぶときには細心の注意が必要です。

壊れかけている弓では、後にトラブルが起きる可能性も大きいです。理想的な毛替え作業も行えないこともあるくらいなのです。私は古い弓自体を否定するつもりはありませんが、不健康な古い弓があまりにも多い（特に高価な弓で）という実情を理解しておくべきでしょう。もちろん、何度も言いますが、全ての古い弓がダメと言っているわけではないのです。

6. 価格

この要素は説明するまでもないでしょう。「コストパフォーマンス」という表現をしても良いと思います。

これらのような「弓の性能の要素」をきちんと理解できて、はじめて実際に弓を選ぶ事ができるのです。

選び方の実際～準備

1. 信頼できる楽器店を、普段から選んでおく

これが何よりも重要なことです。そして一番難しいのはこの事でしょう。今回はこの部分についての説明をあえて省略しますが、この内容が基礎となることだけはいつも忘れないでください。「弓を選

ぶのではなく、楽器店を選ぶ」事こそが、良い弓を選ぶ最も近道であることは間違いのないことです。

2. 現在自分が使っている弓を持参する

次に購入する弓の性能は、現在自分が使っている弓の実性能（価格ではありません）が基準となります。従って、現在使っている弓と弾き比べることによって、次に購入する弓の性能を客観的に判断できるようになるのです。また、アドバイスも受けやすくなります。

3. 2まわり性能の高い弓を選ぶ

購入する弓の性能は、現在の弓の2まわり（以上）は性能が高いものでなければなりません。というのは、1まわり程度の性能差では、高いお金を出して購入した割には、後日、その性能差を実感できないからです。

すなわち、現在の弓の実性能がそこまで悪くなく、そして次の弓の購入予算が限られているような場合には、「今回は購入しない」という勇気も必要なのです。

4. 予算をきっちりと決める

楽器店で多くの弓を目の前にすると、自分の中の選択基準がパニックをおこしてしまいます。その上、楽器店によっては、上手な話術によってわざと高価な弓や楽器を売ろうとする所もあります。人間は面白いもので、自分が僅かに手の届かない範囲の製品を、とても良く感じるものです。これは特に、先のように「判断基準」があやふやになっている時にそう感じてしまいます。逆の事を言えば、これは「商売（軽蔑的な意味で）」のテクニックでもあるのです。冷静な判断基準を失った状態で購入した、このような「高価な製品」は、まともであわげがありません。

すなわち、自分の予算をきっちりと決めることにより（もちろんある程度の幅はありますが）、自分の冷静さを保つことができます。もちろん、この予算を決める上で、事前にその楽器店にて、どのくらいの予算が必要なのかを相談しておくことが前提となります。当然ながら、これには現在使っている弓の性能が基準となります。

5. 性能の良い弓とは何かを、論理的に把握する

これが大切です。すなわち、この事が理解できていなくては、性能を製品価格でしか判断できないからです。当然ですが、製品の価格と実性能は簡単に比例するものではありません。特に高価な弓ほど価格と実性能とが簡単に比例するわけではないという実情をしっかりと把握すべきです。逆に言えば、「性能」の本質が判っている人は、良い弓を選ぶことはさほど難しいことではないとさえ言えるのです。

弓の性能の要素の具体的な内容は、一番最初の記載をもう一度読み直してみてください。

選び方の実際～選択手順

1. 弓竿の強さを知る

先にも述べましたように、弓を選ぶ上で最も重要なのはバランスではなく弓竿の強度を知ることです。

弓竿の材質を見極める時、我々専門家はフェルナンブコ材（弓竿材）の木肌や繊維の詰まり具合を見たり、弓を僅かに曲げてみて、その材料の性能をある程度は見分けることができます。しかし、これは



試奏するときは、あまり毛を張りすぎないのがコツ

プロの演奏家を含め、一般の方々には不可能な技術です。そこで次のようにして弓竿の強度を調べてください。

・全ての弓を同じ毛の張りにする

全ての弓の毛の張り（弓竿と毛との距離）を同じにします。この時、毛を張りすぎないように注意してください。というのは、現在に使っている弓の性能が低いために、弓竿の腰が弱く、それに伴って弓毛をかなり張って演奏する癖が付いてしまっている方が多いからです。しかし、弓毛をパンパンに張ってしまえば、弓の性能差を見極めることができないばかりか、せっかくの良い弓の性能さえも引き出すことができないのです。

・弓の中央部分で、弓を立て（斜めに寝かさない）、弓に圧力を掛けてみる

下写真のように、弓の中央部分を弦に当てて、弓を直角に立たせた状態で（寝かさないようにして）、「クイクイ」と弓に圧力を掛けてみます。この時の「強さ」、「圧力」こそが弓竿の腰の強さ、すなわち性能と言ってもよいものです。

各弓によってずいぶん強さが異なっている事が簡単に判別で



きると思います。この時に、あまりにも腰の無い弓は無条件で却下してください。例えどんなに名前の知っている弓であっても、高価な弓であったとしても（またはお買い得な弓であったとしても）、この時に弓竿が弱いと判断した場合には、絶対に未練を持つてはいけません。それが最も大切なコツなのです。

この作業によって、沢山の弓を数本の候補に絞り込めることができるはずです。

2. 持ってみてあまりにも重すぎる弓を対象から外す

いくら弓の腰がある強い弓でも、あまりにも太くて重すぎる場合には「却下」です。何度も述べますが、この要素は「何グラム」という数値ではありませんので勘違いをしないでください。当然、軽くて細い弓が良いというものでもありません。

3. 大きなボウイングをして弓の「バランス」を知る

ここまでの選択により、腰の強い弓でしかし常識外れに重すぎない弓が候補として残っているはずですが、これらはどれも製品としては良い弓のはずです。しかし、自分の奏法に合った弓でなければ、せっかくの良い弓であっても、その性能を發揮することはできません。

自分に合った弓かどうかを調べるには、できるだけ単純なボウイングをすることがコツです。全弓を使った大きなボウイングで、大きな音量（圧力を掛けて）弾くのです。スケールを弾いてもかまいませんし、ごくごく簡単な曲のパッセージを弾くのも良いでしょう。こうした単純な弓の運動は、自分自身の奏法との相性を確実に反映します。自分に合っていない弓は、例え良い弓であっても、弓運動の途中で弓が飛び跳ねてしまったり、または不安定になるからです。

これは第三者が見ていても、すぐに判るはずで、その逆に、本人が実際に弾いていて、または第三者が見ていて違和感がない弓は、「合っている」と言えるのです。

くれぐれも、難しい練習曲を弾いたりしないでください。というのは難しい演奏内容というのは、弓の位置がわずか1mm違っただけでもうまく演奏できなくなります。従って、異なった弓で演奏するという事は、今までとは若干異なった演奏の技術が必要になるということです。すなわち、曲自体にアップアップしている人が、その変化に対応することは難しいのです。簡単な例を挙げると、「パガニーニの曲が弾けない人に、パガニーニの曲で弓を判断することは不可能」という事です。

弓の基本的な性能、自分との相性は、基本的なボウイングで判ります。候補の弓を持って、いきなり現在苦勞している練習曲を弾き始めるようではいけないのです（このような人はかなり多いのです）。

さて、この操作によってさらに弓は絞込まれるはずで、おそらく1〜3本程度にはなっていると思います。

4. 跳ばしなどの、高度な演奏

さて、この時点で初めて「跳ばし」、「曲のパスセージ」などの高度な技術を弾いてみるのです。それまでは弓の選択に複雑な要因を持ち込むことは良くありません。

このような高度な演奏技術との相性によって、さらに弓を絞り込みます。なお、各弓の毛の質、松ヤニの乗り具合は全て違います。従って、そこから出る音色も異なりますので、そのような意味での微妙な音色の違いは無視してください。

5. 価格、弓の状態の再チェック

この最後の最後の段階で、もう一度、候補に残っている弓の諸条件が自分の当初の予定通りなのかを冷静に考え直してみます。いざとなったら、「今回は一旦帰って冷静に考え直してみます」というくらいの勇気も必要なのです。もしも、楽器店の人が「今買わないと、売れてしまいますよ・・・」と言ったとしても、「もしもそうならば縁が無かったのだ」と思うくらいの勇気が必要です。

6. 最終判断の基準とは、「何となくピンと来た、第一印象」

さて、いよいよ最後の選択です。おそらくこの時点で、ほとんどの方は既に何となく印象に残っている1本があるはずで、そう、それこそが最後に選ぶべき弓なのです。

弓を選ぶ最後の最後の段階で、あまり難しいことを考えてはいけません。特に、他人に対しての「見栄」が出てしまっただけではありません。他人がその弓をどう思うか（どう評価するか）でなく、現在の自分がどれだけ納得して選んだのかこそが重要なのです。もしもこの時点で、そのような「不純な選択要素」が加わってしまっただけでは、それまで行ってきた「基本的で、冷静な選択基準」が台無しになってしまうからです。

最後の1本に決定しなければならない時、もしもまだ迷いがあるのでしたら、「第一印象」が良かった弓を選ぶべきです。というのは、第一印象というのは純粋な意味での判断力が含まれているからです。「何となく良いと思った弓」こそが、ほとんどの場合、「的を射た選択」となっています。もちろん、これは、これまで述べてきた「冷静で論理的な選択」を行った上での話であり、いきなり楽器店に行って、「何となく・・・」という話ではありませんので、その点は注意してください。

良い弓を購入することの勧め

最近では良質なフェルナンブコ材（弓竿材）が激減し、環境保護の対象になっています。最悪の場合には、近い将来に象牙のように輸入規制になる可能性さえあるくらいです。もちろん「輸入規制になる」と決定したわけではなく、将来にその可能性もある

という程度のもので、それでも年々深刻化していることは事実です。

この場で私が、近い将来に良い弓が手に入らなくなると言うつもりは一切ありません。しかし、もしも現在、運良く良い弓に巡り会えたならば、積極的に購入しても損はないと思います。良質弓は楽器本体以上に年々価格が上がっているという現状もあるからです。

そして何よりも、本当の意味での良い弓を使用する事によって、それまでは「演奏不可能」だった弓の圧力の問題が「可能」になるのです。これは新しい演奏の世界観を生む事でしょう。もっとも、誤解しないで頂きたいのは、「上手に弾けるようになる」というのとは違います。

もちろん、焦って、変な（性能の低い）弓を購入を購入してしまっただけでは本末転倒になってしまいますので、くれぐれも誤解の無いようにお願いいたします。



おかげさまで、第1巻（第6版）、第2巻（第5版）とも、ご購入者の感想、各誌の書評などで好評を得ております。

インターネットのホームページでもほぼ同内容を掲載しております。しかし、Web上では読んでいるつもりになって、実際には頭に入らないものです。これに対して、書籍の場合には全ページを物理的な視覚情報として記憶する事ができるため、とても読みやすく、また理解しやすくなっております。これがWeb上のものは無料で、書籍版は有料という所以です。

楽器の事をより深く知りたい方は、是非「弦楽器のしくみとメンテナンス」を読んでいただきたく思います。当工房でも取り扱っていますので必要な方はお声をかけてください。

「弦楽器のしくみとメンテナンス」

佐々木朗 著、音楽之友社 出版 ¥1,600

「弦楽器のしくみとメンテナンス2 使いこなし篇」

佐々木朗 著、音楽之友社 出版 ¥1,800